

## 『板倉政要続篇』と『板倉政事要鑑』

——『後編』系列諸本の特質——

大久保 順 子

近世の京都所司代板倉氏の法令集及び裁判説話集『板倉政要』の裁判説話の型は、近世前期から後期までに様々な「続編」の諸本を生み出している。本稿では従来の諸本調査の成果を踏まえつつ、現存の二写本の諸本における位置付けや裁判説話の様相を追求する。

### 一、香川大学蔵『板倉政要続篇』について

香川大学附属図書館神原文庫蔵『板倉政要続篇』（整理番号二一〇・五―三）、九巻九冊写本。紅檜皮色・さや型地に雲文と丸龍文の型押表紙、縦二六・二cm×横一八・七cm。各冊前表紙左上の無枠題簽（縦一八・一cm×横三・五

cm）に墨書の外題「續板倉政要 壹（一終）」。袋綴、混漉様の楮紙、所々に後補の補紙（楮紙）入り。内題「板倉政要續篇卷之一」（第一冊一オ）。「板倉政要續篇卷之九大尾」（第九冊一オ）。各冊最終丁に尾題「板倉政要續篇卷之一終（一巻之九終）」。柱題なし、字高約一九・五cm（二行字数約十六字程度）、一面行数九行。本文は漢字片仮名混じり文、挿絵・書入等はなし。全二百十三丁（第一冊二十九丁、第二冊二十一・五丁、第三冊二十六丁、第四冊二十二丁、第五冊二十一丁、第六冊二十二・五丁、第七冊三十六・五丁、第八冊二十三丁、第九冊十一・五丁）。各冊に各巻目録が1オ1ウの二丁分あり、2オから本文となる。次の蔵書印がある。

・「神原家図書記」(黒・陽、単梓印、四・六cm×一・三cm)(各冊一才)

・「芸叢ノ之印」(朱・陽、単梓方形印、四・九cm×四・八cm)(第一冊二才)

・「香川大ノ学附属ノ図書館」(朱・陽、単梓方形印、四・五cm×四・四cm)(第一冊一才、他各冊前見返し)

・「寄贈図書ノ神原文庫ノ香川大学設立準備委員会」(朱・陽、単梓楕円印、直径縦三・〇cm×横四・五cm)(各冊一才)

・「昭(乙)和ノ受入119046」(119054)号ノ31・3・30」(青紫色・陽、単梓楕円印、直径縦三・三cm×横四・五cm)(各冊前表紙見返し)

全冊が紺(御召御納戸)色無地布貼帙一帙に収められており、帙簽(前表紙部分・背部分)題に「続板倉政要」とある。丁割れ・破損・墨汚・虫損がみられ、補綴・補修あり。第一冊1才と前表紙見返し間に分類カード(七・六cm×十二・五cm)があり、「神原文庫」印(青色・陽、楕円形印、径〇・六cm×一・七cm)の他に、ペン書きで「續板倉政要1巻ノ9巻ノ9冊ノ26cm和」と記されている。

この神原文庫蔵本は、外題や旧整理票等に「続板倉政要」と記されているが、内題と本文の記述からその内容が国立国会図書館蔵本『板倉政要続篇』二冊九巻本とほぼ同

じであることが確認され、作品名を『板倉政要続篇』(以下、『続篇』と略記する)と認定すべきである。ただし国会図書館蔵本『続篇』と神原文庫蔵本『続篇』とで、巻一の所収話に異同がある。後者の第一冊「巻之一目録」には、次の五話が掲げられている。

#### 板倉政要續篇卷之一 目録

- 一、理非分明ニ主従ヲ御捌之事 ↓\*後編卷五の一
- 一、言ヲ巧テ密通ヲ顕ス事 ↓\*後編卷五の二
- 一、跡目ヲ論スル瓢箪公事之事(国会本ナシ) ↓\*後編卷五の三

- 一、眼前ノ無欲ハ善惡ノ鑑ノ事 ↓\*後編卷五の四
- 一、無實ヲ遁ル即座ノ分別之事 ↓\*後編卷五の五

神原文庫本巻一第三話は国会図書館蔵本『続篇』には欠けている。国会図書館蔵本『続篇』と国会図書館蔵本『板倉政要後編』(以下、『後編』と略記する)とは、同系列裁判話が(異なる話末評語や巻構成を持ちつつ)対応関係にあり、国会図書館蔵本『続編』巻一の四話が、『後編』の巻五内の四話に対応していた。神原文庫本『続篇』の巻一の一・二、巻一の四・五は国会図書館蔵本『続篇』の巻一の四話であり、巻一の三は『後編』巻五の三と同裁判話である。神原文庫本の現存の状態が本来の『続篇』の形であったとすれば、『続篇』巻一は『後編』巻五とまとまっ

て対応していたことになる。

この『続篇』卷一の三（『後編』卷五の三）は『板倉政要』卷六「瓢箪譲与三子事」と同趣の裁判話である。神原文庫本『続篇』卷一の三においては、『後編』『続篇』系列裁判説話の顕著な特徴である事件話末の評語（『評曰……』以下の部分）が、非常に長い分量の記述となつてゐる。<sup>(2)</sup>

<sup>A</sup>評二曰ク、子ヲミル事親ニシカジト古人モイ、シトナン、誠ニ老人モ智有テ殿ノ御發明ナル事ヲ悟リテ此ヒヤウタンヲ遺言ニノコシケルトヤ、常々惣領ニ跡式ユツリ度ヲモヘト継母ノウラミン事ヲヲシハカリ、又ハ御前ノ御差圖ニテ家相続スル程ナラハ、弟トモモ又娘モムコモ何レモウラムマシ、其身モ母ヲ女在ニハ致スマシ、御前ヨリモ此義ハ堅ク仰付ラルベシ、サアレハ子孫繁昌ウタカイアラシト思ヒテ、カクハハカラヒケルトカヤ、<sup>B</sup>亨山子は二付昔シ物語ニ右ノ通り継子継母有テ父ノ死タラン後、必ス跡目ノ論有ルヘキ事ヲ悟リテ、父死スル時ニ懸物ヲ一幅ユツリテ終リヌ、末期案ノ如ク兄弟継母ト論有テ、時ノ有司ニ出テ訴之、有司ノ曰ク、父ノ遺言ハ无キカト被尋所ニ、何ノ遺言モ無之、兄弟中能致継母ニ孝行仕レト計リ申畢ヌ、外ニ何ニテモ譲ラサルヤト重テ被尋、病中ニ掛物ヲ一幅兩人ノ子共ヘ与ヘケルト由、然ラハ其掛物ヲ取ヨセヨ

『板倉政要続篇』と『板倉政事要鑑』

ト有テ即刻差出ス処ニ、此掛物横物ニテ寒山十徳ノ繪ニテ、常躰世ニ沢山成模様サシテ替ル事モナシ、依テ有司トクト一見有ル処ニ、寒山ハ何ヤラ書タルモノヲ開キ不審ヲナシタルテイ、十徳ハニコト笑ヒ指ヲ地下ニ指シタルテイ也、然レハ指頭ニ當リタルハ軸ナリ、軸中ニ何レソ書タルモノ有ラント、則右ノ者共眼前ニテ打ハリ見給フニ、前腹ノ惣領生付ハ少柔弱ナレトモ家相続、次男ハ生質利根發明ナレトモ二男ノ事ユ家財ノ内是々田畑家屋敷是々ト委細ニ書立、是資貨ヲ以テ母ヲ養育スヘシ、継母必継子ヲ惡ム事ナカレト認メ置ヌ、此遺言状ノ如ク相守ルヘシト所ノ小吏ニ命シテ忽訴訟ハ止ヌ、此格ヲ引玉フニヤト云云

国会図書館蔵本『後編』卷五の三の話末評は短く、傍線部Aの部分だけが存在する。しかし神原文庫本『続篇』卷一の三ではその後さらに解説的文章が続き、傍線部B以下では、前腹の長男と継母の実子である次男との間の遺産相続争いの際に遺品の寒山拾得の掛物の軸に遺言が隠されていた例を「亨山子」なる人物の話として引用し検証している。<sup>(3)</sup>

また、国会図書館蔵本『続篇』では中断し「原本此奥一枚不足トミエ他本ヲ以テ校合補ラクヘシ」とされてゐた卷九最終話「宝永年中ニ黒田豊前守直重家来本間平太夫ト云

ル大目付役ノ者錢賣ヲ殺シ……」の事件話は、神原文庫本『続篇』では以下のように結ばれている。

（然レバ其元ヲモ両三度尋ネ白状不被成ト御定ノ問様有之候、夫へ御掛リ不被成）内ニ早ク御落律羽ニ侍ノ法式ニ切腹被成力可然ト申ケレハ、囚人申ハ、譬ヒ惣鉢ヲ鉄ノクサリニテカラミ火責水責ナントニ遭フトテモ中々拙者抔落申事ニテナシトアサ笑フテ少シモ患タル色ナシ、于時石井、其元ノ左様成堅身強勇ナル侍ニハ火セメ水セメハ不致、又手ヲ替ヘテセメ申ト申シケレハ、火セメ水セメヨリ外ニ如何様ノ責様有之ト尋ルユへ、其元ノ様成強キ囚人ハ、日本橋ノ様成巷ニ困居ヲ附テ諸人ノ目サラシニテ、大キナルマナ板ノ上ヘ其元ヲ丸裸ニシテウツフシニ載テ、非人トモニ申付、頭ヨリ足ノ爪先マテヲ毎日イヘト打タ、カセ、折々引起シテハ諸人ニ面ヲフラシ、此侍錢賣ヲ殺シ私ハ不致ト陳シヌルユへ、致タルハ必定ナレトモ不被白状ユヘ如此ト非人トモ力呼立、諸人ヘアラユル悪口ヲ申シ聞セ、又如初、板ニ載テ暮ニ及フ迄如此毎日サスル事也、如此ノ耻目ヲ可受ヨリハ一旦ハ陳シ候ヘトモ与風致乱心ケルヤ、右ノ錢ニ目クラミ私殺シ申候、侍ノ冥加ニ尽タル事ナカラ乱心ノ上ハ是非モナシ、此上ハ即剋侍ノ法式ニ切腹被仰付被下候ヘト願ヒ玉ハ、如

何成事ニモ死罪獄門ニハ及マシ、侍ハ死テノ後ノ名コソ大切ナレ、四十六人見玉スヤ、天下ノ御城下ヲサワカセ御法ヲ破リケレトモ、後切腹シタルニ依テ一天下ニ名ヲ上ヌ、早ク切腹ヲ願レハ誠ノ侍タルヘシト云ヘハ、彼者、然ラハ切腹ヲ可奉願ト申ヨリ初終リ悉ク白状シケリ、仍テ曆々ノ諸役人ヨリモ又石井カ深重ノ手段ヲ感シヌト穴賢々々

#### 板倉政要續篇卷之九終

内与力の石井幾野右衛門が容疑者を尋問し白状させる場面において、傍線部の「四十六人……」以下、赤穂浪士の一件の顛末を例示し比較して相手の武士の自尊心に訴える箇所がある。「宝永年中……」の事件話ひいては『続篇』の成立が、引用の逸話の事件以降であることが考えられる。このような点から、神原文庫本『続篇』は、国会図書館蔵本『続篇』本文の不完全な箇所を補完する写本として位置付けられる。

#### 二、筑波大学蔵『板倉政事要鑑』の巻構成と説話系列

『続篇』『後編』『続板倉政要』の他にも、「板倉」の名を題名に冠したその他の「続編」的裁判説話集が種々存在するが、筑波大学蔵『板倉政事要鑑』もその一つである。

筑波大学附属図書館蔵『板倉政事要鑑』（整理番号ム・2

14・41、東京師範学校・東京教育大学旧蔵）、七卷一冊写本。かちん（濃青紫）色斜め格子文様型押表紙、縦二十

四・四cm×横十六・八cm。前表紙左上の無枠題簽（縦十六・

八cm×横三・〇cm）に墨書の外題「板倉政事要鑑 全」。内

題「板倉政事要鑑 卷之一（一巻之七）」、各巻末に尾題

「板倉政事要鑑卷之一終（一巻之七大尾）」あり。袋綴、見

返し本文共紙、料紙楮紙。字高約十九・三cm（一行字数約

十七字程度）、一面行数九行。全八十丁の内、「卷一」十二

丁（五話）、「卷二」十二丁（五話）、「卷三」十丁（五話）、

「卷四」十二丁（五話）、「卷五」十一丁（四話）、「卷六」

十二丁（四話）、「卷七」十一丁（三話）、各巻の第一丁が

当該巻の目録に相当し、2才以下本文となる。全三十一

話。本文は漢字平仮名混じり文。挿絵・書入等はない。蔵

書印は、

・「岡要／之印」（朱・陰印、二・二cm×二・三cm）（巻二

を除く各巻目録丁才の題の下部）

・「東岡蔵書」（朱・陽印、単梓印、二・九cm×二・七cm）

（各巻目録丁表）

・「丸亀／光文堂／書林」（朱・陽、単梓印、三・九cm×

三・〇cm）（各巻目録丁表）

・「東京師／範学校／図書印」（朱・陽、単梓方形印、六・

『板倉政要続篇』と『板倉政事要鑑』

三cm×六・四cm）（第一丁目表）

などがあり、下小口に「板倉政事要鑑 全」の墨書がある。紺色布貼一帙に収める。虫損あり。

先の「続編」諸本分類稿では、この『板倉政事要鑑』

（以下、『要鑑』と略記する）を「複数の性質が混在した裁判話集<sup>⑤</sup>」と見るに留めたが、その巻構成と形態の特徴を検

討し修正する。以下、『要鑑』目録の所収話の題を掲げ、

その事件話とはほぼ同趣向の裁判話を\*、その他関連すると

みられる話を※として、それぞれ下段に対照する。『要鑑』の話名には便宜上、通し番号を付記し、話末評をもつ

話は丸番号とする。なお、『板倉政要』Ⅱ「板」、井原西鶴

『本朝桜陰比事』（元禄二年刊）Ⅱ「桜」、月尋堂『鎌倉比

事』（宝永五年刊）Ⅱ「鎌」、『日本桃陰比事』（宝永六年

序）Ⅱ「桃」、『本朝藤陰比事』（宝永七年刊）Ⅱ「藤」、

『板倉政要後編』Ⅱ「板後」として、その巻・第何話目が対

照されるかを略記する。それ以外のものについては、

「Ⅰ」に話の概略を記す。」

巻之一①周防守京都所司被仰付事

〔所司代赴任時、妻の指示を牽制〕

2 山科にて牛牢の事

〔入京時、牛が乱入・牛の命を助け牛主へ〕

③ 借家の者宅替致させ度訴訟の事

〔入京時、牛が乱入・牛の命を助け牛主へ〕

③ 借家の者宅替致させ度訴訟の事

〔素行不良の店子の宿替請求・家主勝訴〕

4 木綿盗人の事

\*板巻六の二「壬生地蔵門内ニテ被盜木綿事」

\*桃巻二の五「盗人になる地藏迷惑」

\*藤巻二の五「詮議動かぬ石仏の番」

\*板後巻二の一「木綿盗人の事」

⑤ 妹を質として金を借りし公事

〔遊女の請出先を当てに質受・欲深貸主を叱責〕

巻之二 1 紙入羽織ひろいし事

\*板後巻一の五「貧者の金を拾ふ事」

\*桜巻四の四「人の刃物を出しおくれ」

\*『醒醉笑』巻四の七「山科の百姓」

2 酒狂人の事

\*板巻六の五「酒狂人之事」

3 智略の文にて兄弟対面の事

〔後家の文を若者訴え、血縁と判明し和解〕

4 家督公事

\*板巻六の十三「家督公事之事」

5 三人傘を論する事

\*板後巻一の三「傘の論の事」  
\*『棠陰比事』85「薛絹互爭」

巻之三 1 小指をく、られて借銀思ひ出し事

\*桜巻五の六「小指は高くくりの覺」

2 養子聲出入の事

\*板巻六の十「同養子聲出入之事」

3 預銀手形出入の事 \*『棠陰比事』34「佐史誣裴」

4 本妻と妾との事 \*板巻八の六「本妻与妾之事」

5 入聲の公事 \*板巻八の七「入聲公事」

巻之四 1 勘当にて親子養の差引

\*板後編巻九の三「父子の間に養育料を出さし

むる事」、\*鎌巻一の五「養料の指引」

2 徳政は旅人の仕合 \*鎌巻一の七「善惡の入かへ」

3 「借屋の不義をしかられて済家ぬし」(目録題名欠)

\*鎌巻一の八「通町尻家廿七間」

4 疱瘡は双方のかつき物

\*板後巻六の六「痘瘡を病し双鬢の給金の事」

\*鎌巻二の三「損と損の二割の上意」

5 墓参りは兄弟のちなみ

\*板後巻九の一「養子実子の卒都婆論の事」

\*鎌巻二の四「うちは卒塔婆の諍」

巻之五 1 人の大事は心脈に有事

\*桜巻五の三「白浪のうつ脈取坊」

\*板後巻十三の三「脈にて顕る金盗人の事」

2 人の氣のつかぬ所をみるが賢人

\*桜巻五の九「伝受の能太夫」

3 枯木に花はなんの咲へし

\*桜巻四の六「参詣は枯木に花の都人」

※『棠陰比事』47「崔黯搜帑」・48「張輅行穴」

※板後卷十の一「宝珠も曇る御捌の事」

※鎌卷五の二「心を磨宝珠の曇」

4 墓を築とは金をつけとの裏

\*桜卷三の三「井戸は則末期の水」

卷之六1老たるは、も腰の立時節

〔祖母の過失による孫の死〕

2 鶯によするこひとはしほらしき悪人

\*桜卷三の九「妻に泣する梢の鶯」

3 さりしまひに逢たる仕合女

\*桜卷二の九「京に隠れもなき女房去」

4 弁慶は腹に三年三月

〔妊娠期間と新生児の認知をめぐる争い〕

卷之七1盗判とはいはれまい御判談

〔家の二重質入と証明印の不備を叱責〕

2 生れ子は軽きものなり

〔取り紛れた二人の新生児の区別〕

3 山の芋の鰻となるはまこと也

〔魚食の僧と檀家との争い〕

『要鑑』巻頭には「伊賀守殿周防守殿両代の内、公事訴訟其数揚てかそふへからず、其中にてもよき捌のよし諸人譽るをしるす」とあり、卷之一第一話に板倉周防守とその

『板倉政要続篇』と『板倉政事要鑑』

妻の逸話<sup>(6)</sup>が掲げられ、以下ひき続く形で京都所司代の裁判説話が集められている。内容は『板倉政要』『正編』や『本朝桜陰比事』『鎌倉比事』、さらに『後編』等の話とも重なる。浮世草子等の先行作品からの採録の見られる点から、近世初期の『板倉政要』よりかなり後代に成立したとみられる『後編』系列の「続編」裁判話集の一種として、『要鑑』も位置付けられよう。

先行の裁判話作品に独特の翻案を加えた形象化はこの『要鑑』の随所でみられる。例えば『要鑑』卷二の五「三人傘を論ずる事」は『後編』卷一の三「傘の論の事」と同趣であり、いずれも『棠陰比事』『薛絹互争』のような物品の所有権争いを、本朝の事件風に翻案した話とみられる。

・前漢時臨淮有一人。持鎌入市、值雨以鎌披覆、後一人至求庇蔭。与鎌一頭。雨霽当別、因互争鎌。(『薛絹互争』<sup>(7)</sup>)

・むかし都の町にて、俄に大夕立にて雨瓶を翻す如く往還水流て海のことなる折から、一人の正直らしきもの傘さして心静に通るものあり、又老人の利口らしきものぬれなから来たり、此傘の内しはらく御かし給はるへしと腰をか、めいんきんに請しかは、…(『後編』卷一の三)<sup>(8)</sup>

・西の洞院二條上る町山形屋忠右衛門といふもの、清水参詣しけるに、白雨にあひけり、から笠の用意したりければ尻からけにて帰りける処に、後より若き男一人御無心ながら其笠の下へ御入下されといへは、忠右衛門安き御事、式人相傘来る処に、また祇園前にて壱人走り来り、俄雨にて難儀なり、其笠の内へ御入下されといふ、忠右衛門安き事にて候へとも、是も壱人の道つれにて御覧のことく相合笠のうちに入申事きのとくなくから其元も見捨てたし、御入候得、少しのたりには成申へしと二人相合かへりしに、四条柳の馬場にて：（『要鑑』卷二の五）<sup>9</sup>

月代の内部の濡れ方から持ち主が判明する点で同趣の裁判話であるが、A『後編』では二者間の争い（持ち主・借り手）であるのに対し、B『要鑑』では三者間の争い（持ち主・借り手1・借り手2）であり、さらに混み入った争いの話となっている。B『要鑑』の話は全般的に、より個人的な京都市中の地名や登場人物名（訴訟人・被告人等）が設定されてもいる。同じ京都市中の事件の例をみるに、

・むかし都の両替町に小判の買置銭の相場。日に幾たびか商ひ事有：（略）或時人の手代小判拾両かりて。四五日も帰へさぬうちに借方かの若ひ者。帳面ちやうめんきえぬをせんさく仕出し。（『本朝桜陰比事』卷五の六）<sup>10</sup>

・昔し都の町に両替屋の金兵衛とて身上宜しき商人あり、此手代早四郎隣町の小商人に銭五拾貫文内證にて借しければとも（『後編』卷七の二）

・下立賣油小路東へ入る町に會津屋弥兵衛とて有徳の者大勢手代を抱へ置見事なる両替みせにて有りしか、近年殊外不仕合にて：（略）然る処に坂多屋八左衛門とて親の代より今に至て相替らぬぶんけんしやなり、弥兵衛近所にて数十年ねんころにすなれば：（『要鑑』卷三の一）

のように、『本朝桜陰比事』の筋に人物名を付与した『後編』の「昔し都の町」の等本文とも異なり、卷三の一は個別の地名と人物名を加えた展開となっている。

その一方、『板倉政要』からの採話とみられる事件話については、卷一の四「木綿盗人の事」の冒頭部の例では

・上京ニ住スル木綿売、九月ノ初メツカタモメン売ニ出ケルガ、草臥ケレバ壬生ノ地藏ノ門内ニ木綿ヲ、ロシ置テ堂ノ縁ニ腰ヲカケ暫シ休ヒ眠リノ内ニ、彼ヲロシ置タルモメン無之、去程ニ右往左往ニ尋ネケレトモ：（『板倉政要』卷六の二）<sup>11</sup>

Aこれも都の町の傍に石地藏有けるが、緑樹繁茂せし涼しき所なれば盛夏の頃は石をもとろかすへき熱に堪かね、往来商人とも来りあつまりて風をむかへ汗をのこ



ひけり。或時木綿賣この地蔵のそはに木綿の荷物おろし暫し休居たるにとろく寝いりける内に、おろし置し木綿失せけり。もめん賣おどろきあたりを尋ければも初おなしく涼居しものとも、壱人もなし：（『後編』卷二の一）

B 上京に住する木綿賣、九月の初木綿賣にあるきしに草臥しかば、壬生の地蔵の門内に木綿をおろし置、堂の縁にこしをかけ、しはらくやすらひねふりの内、かのおろし置し木綿みえず、右往左往に尋れとも：（『要鑑』卷一の四）

とあり、翻案的なA『後編』に比べてB『要鑑』本文は『正編』に近い。こうした本文の性質は卷二の二「酒狂人の事」をはじめ卷二の四、卷三の二・四・五などに共通する。『要鑑』には、先行裁判話を板倉話的に翻案する要素の一方、このような『板倉政要』『正編』事件話の伝承を意図するかのごとき、言わば『正編』の異本的な要素も混在している。なお、卷之五・六の『本朝桜陰比事』からの採話とみられる話群にも、比較的原話の形に近いものが見受けられる。

さらに『要鑑』には、『続板倉政要』系列とも『後編』系列等の「続編」裁判説話とも異なる、次のような話も含まれている。

『板倉政要続篇』と『板倉政事要鑑』

○弁慶は腹に三年三月（卷六の四）

姉の小路通りに衣の棚藤屋長右衛門といふ金借屋有、大佛の耳塚の前に紺屋善兵衛といふもの、娘、美女なれば手かけ奉公にかゝへて川原町の裏座敷にさし置、下女兩人つかはし側の慰みにかよひしか、ほとなく懐胎せしか、十月に成ても十五月に成とも産の気なし、此上は病にて有へしとて、心やすき出入の醫者を頼み、薬を二百服はかりのませても替る事なき故、親善兵衛方へ送りつかはし心まかせに養生致させけるか、廿七月めに安く平産、玉の様成男子をうみ、さつそく長右衛門方へ申つかはせは、其儀此方に曾而知らぬ事也、尤女にも此度暇をつかはすの間、已後此方にかまひなきま、如何様にも勝手次第、と申越により、大きにおとろきしんるひと寄合相談し、長右衛門方へ段々申つかはせ共、一圓合点せぬゆへせひなく御訴訟申上れば、双方對決被仰付に長右衛門申上るは、あの母を四年已前に召抱へ下屋敷に差置折節なくさみに参候処に、去々年十月産の月に当候段申候故、去々年の八月十五夜のぼん下屋敷あの女方へ罷越候、それより後は女に對面も仕らすは、かくし子と申候へとも去々年の春懐胎のよし、それより廿七ヶ月、只今三月迄三月ふりになり候へは、中く私の子にては無御座候と申

上る、然らは常々其下屋敷には手代にてもさし置男の有てやと御尋、または男の出入りにても有かとなり、去々年十月より去年の春迄出産相待候へとも、其儀無御座候、定而病と存、日頃念頃に仕候山科了衣と申醫師へ頼候て腹薬致させ候へとも相替候儀なく候故、去年霜月に善兵衛方へ預置候、尤下屋敷に手代も差置不申、下女式人つかはせ置候迄にて、右の醫者見廻れ候外には男の出入は無御座候と申上れば、男の出入さへなくは女はかり住て外の子にて有へき子細なし、殊に妻同前のものなれば外の子か汝が子かといふ事は汝より外に知るへきいわれなし、然るにケ様に異論に及ふ段不届なり、むかし唐土にて老子と申人、胎内に居る事八十余年、生れたる時白髪の小兒也、かるが故に老子といひて大唐四百余州にならひなき聖人なり、本朝にても熊野の別当弁照か子は三年三月にて出生し其保童にあかふてよいそと申たる子は武蔵坊弁慶とて義経公につかへ武勇の者なり、ケ様のためしもあれは廿七月は扱置、百ヶ月に出生も有間敷事といはれず、ケ様のわけをしらざる故争ふも断也、大かた其子も何ぞには勝れたるへし、尤く世倅に紛れ有へからず、罷立と有ければ、各道理にふくし板倉殿の文才を感じ入て退出せり

妾の懐胎期間が長すぎることに疑いを抱いた主人側が子の認知を認めず争いになるが、奉行は「李母懐胎八十一載」「生而白首。故謂之老子」<sup>(13)</sup>等と伝えられる老子伝説や、「限りある月には生まれず、十八月にぞ生まれける」「生まれ落ちたる気色は、世の常の二三歳ばかりにて、髪は肩の隠るる程に生ひて、奥歯も向歯も殊に大に、一口生ひてぞ生まれたる」<sup>(14)</sup>等といわれる弁慶の逸話に言及する。元々、当事者同士のみが真相を知りうる騒動である。奉行は事実関係の追究というより、可能性が皆無ではないという方便によつて收拾を図っているようである。

○卷七の三「山の芋の鰻となるはまこと也」

山科村に十左衛門とて七十有余に成律義の百姓有、後世願禪門なりしか、或時旦那寺の禪久院を齋時に呼ける、父の五十年忌なれば調菜等念を入、椀加具等もうつり香なきやう湯にてとうし諸事ていねひに待候処へ、禪久院参られ申さるゝは、夜前は旦家の内え呼れ参りしか何あたり候ともおほへず、少し食たゝりの気味にてつかえ差発り氣ふんもすくれ不申候へとも、大切成年忌、其上兼日よりの約束なれば、伺公致し候と申さるれば、これは別して忝し、亡者も本望たるへし、御免かう迄にて御齋時上ケたしと申せは、小短く勤をしまへは、亭主懷を持出をるゝ膳に向ひ和尚も

二はし三箸くわれけるか、下地はわるし田舎料理の油  
だくさん成重きことなれば、忽はらにさわり縁先につ  
き返されたるをみれば、すきとうなきなり、家内のも  
のとも興をさまし、扱は夜前うなきのかはやきにて食  
傷せられしとつふやきけり、十左衛門もにかく敷風  
情に和尚も不首尾にて帰られける、十左衛門村中を寄  
せて件のわけを語りけるは、只今迄ケ様の悪僧としら  
す先祖のぼたいを頼置しこと遺恨也、位牌をおくも穢  
らわし、とかく此度願ひを立あの坊主追出か、又願ひ  
かなはすは寺をかへて石塔も引取へし、各いかにとい  
へは、田舎のかたいぢとも、尤の了簡なりと皆同意  
し、連判にて言上致しければ、禅久院召出され、其方  
済家禅宗の僧にして肉食を致すこと罪科甚し、破戒の  
事可有の間真直に申へし、陳するにおるてはかふもん  
に及ふへしと仰なれば、畏て申上げるは、愚僧事佛の  
戒法破り候事一事も無御座候、若年の時より誓文書き  
し昼夜座禅をおこたらず教外別傳不立文字の佛意をは  
さとり、八歳の時出家と成、五十八歳の今日迄魚肉味  
かつておほへ不申、然るに一昨日十左衛門方にて鰻を  
吐出し候儀は、前の夜旦家の内にて山の芋の白煮に葛  
を掛けて出候を日頃好物故大ぶん給申ける、定て右の山  
の芋自然蕨にて腹中へ入鰻と変し、これによつて食傷

仕たりと覺へ申と言上なれば、如何様有間敷事にもあ  
らず、善導大師も佛を喰は致さるまし、けれども三尊  
の吹出されたり、其方も五拾余年修行の功により、佛  
を吹出さん下地に鰻を吐たるへし、然し愚智文盲の百  
姓なればケ様の学文せんさく合点致すましの間、近々  
に相應の弟子に寺を譲り、其方は隠居致し、いよく  
臨濟禅師の名を挙へし、尤後住の儀は村中立合相談の  
上、山の芋の嫌らひを吟味して極へしと被仰付たり

山芋が鰻と化するとする説は古来あり、「又有薯蕷久所  
湿浸而化鰻鱺者、自非情成有情者是亦不必盡然也」(寺島  
良安『和漢三才図会』卷五十「鰻鱺」・「薯蕷溪邊出岸時時  
感風水即變鰻見半變者人往往有」(同卷百二「薯蕷」)等と  
伝えられる。「山のいもうなきに化る法事をし」『俳風柳多  
留』初編<sup>(16)</sup>ともいわれ、また「或寺に不如法の事ありとて  
地頭より穿鑿あり。寺よりは曾て無しと云ふゆゑ後は家捜  
しをなすとき厨下を視れば一籠を覆せり。開て見れば中に  
鰻魚あり、検使して破戒の物ありと云へば、主僧騒ぎ應て  
曰くこの物は今迄は山芋にて有りしかと。人皆拍掌せりと  
ぞ」(松浦静山『甲子夜話』卷七十一)といった話のよう  
に、肉食の破戒僧の方便に用いられる例は多い。<sup>(17)</sup>『要鑑』  
卷七の三の僧の弁解に対して奉行は、中国浄土教の大成  
者・善導大師(六一三―六八一)の口称念仏の逸話を引用<sup>(18)</sup>

して応酬し、頓智笑話的な巻末話となっている。

各所収話を見るに、『後編』や『続篇』巻一―巻八では各話が「裁判話＋話末評」の形に整えられていたが、『要鑑』では一部の裁判話に「評曰…」の部分があるものの、その形態で全編が統一されてはいない。「評曰…」以下の評語部分を話末に持たない『板倉政要』『本朝桜陰比事』等からの採話とみられるものには、事件話の部分だけの翻案が多い。さらに、『本朝桜陰比事』巻五の九「伝受の能大夫」・『鎌倉比事』巻一の八「通町尻家廿七間」がそれぞれ『要鑑』では巻五の二「人の気のつかぬ所をみるが賢人」・巻四の三「借家の不義をしかられて済家ぬし」に、また、水を張った金盥に証文を入れて偽造を見破る『棠陰比事』『佐史誣裴』が巻三の三「預銀手形出入の事」に翻案されているとみられるが、『後編』『続篇』にはこの三話と同趣の裁判話は採られていない。同作品の別の裁判話が採られ翻案される点や、本文の特徴的な面等から考えるに、『要鑑』は『後編』系列裁判説話集と同様の編集方法を取りながら、『後編』『続篇』の（巻構成に非常に近い関係性が認められる）系統とは別に成立している可能性が考えられる。

以上の二写本からは、『後編』系列の裁判説話がもたら

した、浮世草子の作品の近世中後期以降の説話・伝承化の様相を窺うことができる。史実的な逸話とされる『板倉政要』裁判話と虚構の文芸として造型された裁判話とが共に摂取され、写本の書承の中で融合し再生産されるという『後編』系列の方法は、（現時点で未確認の諸本に至るまで）裁判説話集というテキストが限りなく発展し増殖する可能性を示すものといえよう。『要鑑』の例は、「(ア)：『正編』の裁判話と重複するもの」と「(ウ)：後代の再編裁判説話集<sup>19)</sup>の性質を合わせ持ち、説話の変奏と伝承の様々な要素を取り込んだ複合的な「集」の様相をなしている。数多くの形態が存在し迷宮的な様相を呈する『板倉政要』『続編』諸本であるが、神原文庫本や『要鑑』の検証例のように、形態の系列を参照しつつ各本を位置付けていくことにより、その裁判話群が「板倉殿」と「京童」の裁判説話として生み出されていく世界を見通せるのではないだろうか。『後編』等の後代再編説話集系列の話が、もう一つの系列――『続板倉政要』系列の裁判話――と重ならない、という状況は『要鑑』の例にも認められるため、別系統の裁判説話として各々の内容の検討を行いたい。

注

- (1) 拙稿「『板倉政要』「続編」諸本考」(『香椎潟』45、平11・12)
- (2) 以下の本文引用は神原文庫本『板倉政要続篇』(香川大学附属図書館蔵)に拠る。用字等は原則として本文に従い、適宜読点を施す。
- (3) 小二田誠二氏「ヨミの口演—江戸軍談から実録類までへ由井正雪の場合—」(『講座日本の伝承文学』4、三弥井書店、平9・7)によると、『玉露證話』『望遠雜録』に名が見える正徳期から享保期頃に活躍の人物「亨山子」の指摘がある。『続篇』の成立時期はその以降であろうか。
- (4) 国会図書館蔵本『板倉政要続篇 坤』(第二冊)本文巻末部分に拠る。
- (5) 同(1)。
- (6) 「其頃京都は大坂乱後よりさわかき一圓にやまず、板倉伊賀守勝重病死の後、江戸におゐて御沙汰有て、勝重の嫡男周防守重宗所司として都にのほり公事沙汰并仕置の義被為仰付けられ、周防守御老中に向ひ給ひ、貴命相かしこまり奉り候、宿所に帰り愚妻と相談仕り御請可申上候条、乍恐御前よろしく頼奉るよし申上られければ」(周防守殿京都所司代被仰付事)という所司代赴任時の周防守の逸話が第一話である。
- (7) 静岡県立図書館蔵『棠陰比事』(山本北山、無刊記和刻本)

『板倉政要続篇』と『板倉政事要鑑』

- (8) 本文は、拙稿「翻刻『板倉政要後編』(上)—巻一—巻七一」(『文芸と思想』63、平11・2)及び国立国会図書館蔵本に拠り、適宜読点を施す。
- (9) 本文は筑波大学中央図書館蔵本に拠り、適宜句読点を施した。
- (10) 『本朝桜陰比事』本文の引用は『定本西鶴全集 第五巻』(中央公論社、昭34・1)に拠る。
- (11) 『板倉政要』本文は国立国会図書館蔵本に拠り、適宜読点を施す。
- (12) 『史記評林』巻六十三・老莊申韓列伝第三「正義曰」以下(漢文大系第六、富山房、明44・4)
- (13) 葛洪(二八三—三四三)『神仙伝』(中国古典新書、明德出版社、昭58・11)巻一。なお、「或云、母懷之七十二年、乃生。生時、剖母左腋而出」ともある。
- (14) 『義経記』巻三「熊野の別当乱行の事」「弁慶生まるる事」(日本古典文学全集31、小学館、昭46・10)
- (15) 『和漢三才図会』(上)(下)『(東京美術、昭45・3)
- (16) 明和二年刊。『誹風柳多留(一)』(岩波書店、平7・7)に拠る。
- (17) 日本随筆大成第三期第八巻『甲子夜話 下巻』(同刊行会、昭5・8)。古くは行基が鱈を食して吐き「コト／＼クチサキ魚トナリテ又池ニ入ツ」伝説(東寺観智院本『三宝絵詞』中・法宝「行基菩薩」、古典文庫、昭40・5)があり、『宇治拾遺物語』の「氷魚盗食タル」僧の例等もある。

(18) 合掌し唱えた念仏が阿弥陀仏となり口から飛び出す、という大師像は、増上寺蔵『法然上人絵伝』の「善導和尚来現を拝写せしむる図」や、『絹本着色善導大師像』（鎌倉・室町期、山形県・本間美術館蔵や岐阜県・立政寺蔵等）など、善導大師説話の図像表現の例によく見られる。

(19) 同(1)の拙稿における諸本の大まかな分類に拠る。

「(イ)『正編』の増補的内容」(Ⅱ『続板倉政要』系列)を含んでいないものと考ええる。

なお、本稿は日本文芸研究会第五十五回大会（於東北大学、平15・6・13）の口頭発表における調査報告内容の一部をもとに加筆訂正を施したものである。